

温達將軍の山城

そう、奥さまは王女様だったのです



韓国・温達山城の城壁

ところは朝鮮半島、高句麗・平原王の時代。見栄えは悪く、乞食をしながら盲目の母とその日暮らしの男がいた。名を温達という。朗らかな人であったが、人々は彼を「バカ温達(バボ・オダル)」と蔑んだ。

平原王の王女は幼い時よく泣いたので、困った王は彼女に、「そんなに泣いてばかりいると、身分ある男の妻にはなれない。バカ温達に嫁がねばならないぞ」と口癖のように言うのだった。

適齢期となった彼女は、ある豪族のもとへ降嫁することになった。ところが王女は、「王は温達の妻になるといつもおしゃっていたのに、ここに及んでその言葉を翻すとはどういうことでしょうか。匹夫でさえ嘘を言うまいとするのに、王たるものが戯言では困ります。だから私は王の言うことには承服しません」と言って、宝物の腕輪を持って温達のもとへ走った。

温達に会った王女は心中を話して妻になろうとするが、彼にはにわかに信じられず、これは狐の仕業と勘ぐった。盲目の母も「高貴なあなたが、こんな貧しいところに来るものではない」と断るのであった。それでも「心が合えば富貴になった後でなければ暮らせないとはいかざらないでしょう」と説得し、持参した腕輪を売り、田地・家屋・奴婢・馬を買って暮らすことになった。妻となった王女は温達に、「市場で商人の馬を買ってはなりません。国の馬で病気で瘦せて見放されたのを買って来なさい」と頼んだ。温達は言うことを守った。妻はその馬を懸命に飼育すると、丈夫な馬に成長した。

高句麗では三月三日になると王が狩をし、獲物を神に捧げる祭りがあった。温達もその馬で狩に参加すると、最高の収穫をあげたので、王は彼の名を尋ねると、驚いた。

中国が攻めてきた時には、温達は先鋒として敵軍を退け、論功行賞では第一とされ、王は温達を「私の婿である」と公言し、彼は栄達した。

平陽王が即位すると、温達は新羅に奪われた土地を奪回すべく、王に出陣の許可を請うた。王はそれを許した。兵を受けられた温達は阿旦城下で新羅軍と戦ったが、流矢にあたり戦死してしまった。葬儀を行おうとすると、霊柩がどうしても動かないので、妻が来て棺を撫でながら「死生はもはや決まっています。帰りましょう」というとついに持ち上げて帰えり、葬った。

『三国史記』卷第四十五列伝第五(六興出版刊を参考)



高句麗壁画古墳に描かれた騎馬像

この話で面白いのは、妻の役割である。少なくとも、家の経済の主導権は妻にある。腕輪のもつ貨幣価値の話などは、日本の古墳から出土する腕輪の性格を考える上で参考になる話である。

また、高句麗は騎馬民族の国家とされるが、注目されるのは妻が馬を飼育している点である。寺岡 洋氏の説では、馬の飼育という騎馬民族のアイデンティティにかかわる部分で女性が極めて大きな役割を担っていたのではないかという。



張出した部分

温達山城の水口(斜めから見る)
口下の横長の石が、外側に張り出している

さて、この話に登場する温達將軍に由来する名をもつ山城が、忠清道永春里にある温達山城である。新羅と高句麗の角逐場となった竹嶺山脈に近いこともあり、阿旦城とは、この城を指すとの説もある。城壁は修復が進み、当初の形を残す部分が少なくなりつつある。その中で水口に注目すると、水口の下側が舌状に張り出している。この形式は高句麗の山城にも見られるものである。日本では、福岡県行橋市の御所ヶ谷山城で見ることができる。



石の採集(城内)
城壁の石と同じく、薄く割れる節理の石。
1つ1つは大きくない。

韓国の城郭遺跡の整備では、山腹や谷に崩壊した、もとの城壁の石材を再利用して修復することは、見たかぎりではあまりしない。恐らく、面倒だからであろう。

温達山では、城内の岩盤を掘り起こして切り出した石材を使用していた。表土層が薄いので、容易らしい。足場用の材木も、その辺の木を伐りだしている。当時の築城もこんなものだろうと思わせる。

現在では、「合ハイ」の学生がこの山城によく登っているようである。

「城踏」；韓国では、閏月に山城や邑城の城壁上を歩くと、1年間足の病にならないという民俗儀礼がある。これをSung Balbkiといい、あえて日本語に訳せば「城踏み」となる。



「城踏」の様子